

称号及び氏名	博士（人間科学） 大橋眞由美
学位授与の日付	平成24年3月31日
論文名	近代日本の〈絵解きの空間〉 —幼年用メディアを介した子どもと母親の国民化—
論文審査委員	主査 田間 泰子 副査 伊田久美子 副査 住友 陽文 副査 浅井美智子

## 論文要旨

### はじめに

本研究では、近代日本に於いて、幼年の子どもを読者対象とした絵本・絵雑誌を介した、子どもと母親の国民化の問題を検証した。幼年の子どもがそれらと出会う時には、媒介者、概ね母親の介助を必要とする。それらを介して子どもと母親が語り合う場を、〈絵解きの空間〉と名づけ、絵本・絵雑誌の表象と関連文書の言説を分析することを通して、社会構築主義の立場から、近代日本の〈絵解きの空間〉の意義を論考した。

絵本・絵雑誌は、出版物であることから、法律や経済、時代思潮や規範と無関係ではあり得ない。それらを介した〈絵解きの空間〉では、媒介者である母親と読者である子どもの間で交わされた言葉も、思潮や規範から逃れ難かった、と考えられる。

序章では、〈絵解きの空間〉は子どもと母親の国民化に関与した、と仮説を設定した。その検証のために、絵本・絵雑誌と関連文書に見る、帝国国家の国土と人口の拡張と再生産のためのナショナリズムの推進、そのための差別的関係性としてのジェンダーの構築、それを目的とした家庭教育の振興、その教科書的役割を担った媒体と教師的役割を担った媒介者の成立、および〈絵解きの空間〉で交わされた言葉に対する統制を、分析課題とした。その際に、メディアの3つの意味、情報媒体、媒介者、手段をキー概念とした。

### 各章の概要

序章では、近代日本に於ける国民化の意味を検討するために、時代思潮を概観した。近代日本の国民は、臣民として創出され、その暮らす領域は、常に抗争の対象になった。ナショナリズムとは、天皇制を正当化した〈国体〉というイデオロギーに基づく帝国国家の拡張と再生産のための思想および運動であった。

1章では、絵本の生産・流通・受容の諸問題を通史的に辿った。絵本、媒介者、〈絵解きの空間〉が、19世紀末には個別的な存在としてあったが、その後に展開された家庭教育の振興に伴い、20世紀中葉にかけて社会的な存在として位置づけられたことを明らかにした。

2章と3章では、20世紀に入り1920年代までの絵本・絵雑誌の表象分析を主とした。2章では、絵雑誌の嚆矢『お伽絵解 こども』（1904-11）が、日露戦争に関連した情報媒体であったことを明らかにした。この誌には、未就学の子どもを国民化させるためのナショナリズムに支配されたジェンダーが表象されていた。ところが精査すると、女子像には、再生産のみならず拡張にも関与する表象も見られ、女子への期待の多様性と多義性を指摘した。

3章では、金井信生堂の創業期絵本（1908-23）を事例として、〈赤本〉と蔑称された絵本の情報媒体としての意義を考察した。ナショナリズムとジェンダーの雑多な表象が見られたこれらは、〈大衆の憧憬図〉となり、個別の家族の暮らしを臣民の暮らしとして画一化するための情報媒体になったことを明らかにした。

4章と5章では、1910～30年代の絵雑誌を絵解きする母親と〈絵解きの空間〉の変容について論じた。4章では、近代日本の幼児教育と女子教育、家庭教育、および絵本・絵雑誌改善の指導者であった倉橋惣三（1882-1955）と、その監修絵雑誌『日本幼年』（1915-23）を事例とした。倉橋の言説分析から、子どもは〈可愛い〉存在であり、母親は母性愛を以て子どもに関与しなければならないとした、倉橋の個人的な信念が、社会的価値規範として構築され、〈私〉領域から〈公〉領域にまで拡散し、定着していく過程を指摘した。それは、母親達を〈お母様方〉と名づけることを通して、媒介者としてエージェント化するものであった。

5章では、『子供之友』17～25巻（1930-38）で展開されたメディア・イベントを取り上げ、メディアと読者の関係性を検証し、これが、国民化のための教育プログラムの一形態であったことを明らかにした。〈甲子上太郎会〉は、ユートピア思想の習慣的実践の場であり、〈甲子さん上太郎さんたち〉は、理想的な国民のひな形であり、一連のメディア・イベントは、世帯を基礎単位として帝国国家を構築し、臣民として子どもや母親を回収するためのイデオロギー装置であった。

6章と7章では、1930～40年代の国策と絵本・絵雑誌の生産者の関わりについて主に論じた。6章では、この時期を代表する講談社から刊行された『講談社の絵本』（1936-42）と『コドモエバナシ』（1942-44）を総称して叢書《講談社の絵本》として取り上げ、その付記を分析した。この叢書は、戦時のナショナリズムを表象した情報媒体であり、母親をコントロール可能な媒介者と見なしていた。それは、〈絵解きの空間〉が、「高度国防国家」構築のための通信回路となり、天皇と母親と子どもの関係性を構築させるための手段になり得る、とする認識であった。

7章では、戦時統制期に活動した絵本生産者2社、金井信生堂、岡本ノート・創立事務所を事例として、生産者の主体性を検証した。検閲官や母親も出席した生産者主催の座談会と、2社刊行絵本の表象および付記の分析から、戦時統制に対する生産者の対処の仕方を検証した。絵本に対する戦時統制は、〈統制される〉と〈統制する〉の関係性を無限に増殖させて、〈絵解きの空間〉で交わされた言葉に対する言論統制にも及んでいた。それは、「高度国防国家」構築を目的として、絵本を教科書、母親を教師、〈絵解きの空間〉を回路と見なして、そこで交わされる言葉を統制することで、母子一体の国民化を図るものであった。

以上の章構成は、絵本・絵雑誌に於ける、帝国国家の拡張と再生産を巡る内容の分析にはじまり、〈絵解きの空間〉に於ける、子どもと母親の国民化を巡る実践の分析に至るものになった。終章では、これまでを振り返り、メディアの問題を考察して、そこから国民化のために期待された臣民としての主体性を論考した。

## 本研究によって得られた知見

近代日本の絵本・絵雑誌には、ナショナリズムとジェンダーの表象が見られ、関連文書には、ジェンダー化された主体性の構築を強要するような言説が指摘できた。しかしそれらは一様では

なく、時代が下るにつれ、変容しつつ確立していた。

第1に、表象分析に於いては、ジェンダーの観点から見ると、日露戦争直後には、多様性があった。家庭教育の振興に伴い、第一次大戦頃から、ジェンダー表象が顕著になり、多様性が減少して、「十五年戦争」の戦時期になると、子ども像はジェンダー化された国民の表象に回収された。

第2に、子ども像の多様性が減少すると同時に、媒介者である母親に対して母性愛の構築を強要するような言説が生まれた。個別的な母子関係や〈絵解きの空間〉に対して、家庭教育論者から支配的な言説が発せられ、メディア・イベントを通して読者や読者家庭が平準化されて、母親は家庭教育の教師と位置づけられた。戦時期になり、「母の頁」が設置され、母親は子どもを「高度国防国家」の一員として主体化させるための絵解きを指示された。

第3に、〈絵解きの空間〉に於いては、19世紀には多様な言葉で語られる自由性があったが、20世紀に入り家庭教育の振興に伴い、語られる言葉は統制されていった。〈絵解きの空間〉は、国民化のための言語政策、国語教育を家庭に導入させ、帝国国家と母子の親密な関係性を構築させるための手段になった。

第4に、メディアと国民化の関係から見れば、単行の絵本よりも、継続的に管理の容易い絵雑誌は、国民化のための媒体としてより有効であった。婦人雑誌と絵雑誌の連携や、あらゆる年齢層を読者対象とした出版機構は、家族全員の国民化を容易にした。媒介者を必要としない漫画絵本では、子どもへの直接的な働きかけがなされた。

以上から、〈絵解きの空間〉を介して、子どもと母親は臣民として主体化されることで、国民化されていった道筋が明らかになった。しかしながら表象の多義性を精査すると、次のような点も明らかになった。

第5に、先行研究では指摘されていない点として、女性の国民化に於いては、一見受動的にみえる表象の多義性として、欲望する主体としての国民化も読み取ることができた。女性の欲望は、男性の兵役や労働に対する大義名分を構築させると共に、ナショナリズムを支えるものとなる。

第6に、生産者に於いては、表象の多義性を利用した可能性も指摘できた。戦時統制期にあって、積極的な叛意を示せないものの、表象に多義性をもたせ、多様な〈絵解きの空間〉の多様な絵解きに託すことで、一元化への抵抗を示した生産者もいた。

絵本・絵雑誌の表象分析と関連文書の言説分析から、以上の知見を得ることができた。そのあり方には、直截的な文字ではなく、絵解きによる読み手の積極的解釈を可能にする絵本・絵雑誌ならではの多義性を指摘することができたが、総じて〈絵解きの空間〉に於いて、読者である子どもは、情報媒体である絵本・絵雑誌、媒介者である母親の絵解きを介して、〈私〉と〈公〉の境界を曖昧にしていくような多様な表象を目にしていた。様々なメディアを介して、時間をかけて展開された子どもと母親の国民化＝臣民化は、様々な境界に対して、内部からの崩壊や喪失をもたらすものであった。

以上から本研究では、次のような結論を導いた。近代日本の〈絵解きの空間〉は、子どもと母親に対して、イデオロギーである〈国体〉をあたかも実体であるかのように見せかけたナショナリズムとジェンダーの多様な表象を繰り返し提供し、国策に沿った絵解きを促し、臣民として主体化させることを通して、その国民化に関与するものであった。

## おわりに

本研究では、次のような課題が残された。第1に、家族の表象に関する絵本・絵雑誌と国定教科書の照合である。第2に、他のメディアに於ける女性の欲望の表象に関する調査である。第3に、受容に関するインタビュー調査である。これらの課題を残しながら、本研究を終わりとした。

## 学位論文審査結果の要旨

学位論文提出者氏名 大橋眞由美

学位論文題目 『近代日本の〈絵解きの空間〉

—幼年用メディアを介した子どもと母親の国民化—』

本学位論文審査委員会は、人間社会学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

### 1) 研究テーマが絞りこまれている。

大橋眞由美著『近代日本の〈絵解きの空間〉—幼年用メディアを介した子どもと母親の国民化—』(以下、「本論文」とする。)は、近代日本に於ける幼年の子ども対象の絵本・絵雑誌を介した、子どもと母親の国民化の問題を検証したものである。幼年の子どもと母親が絵本を介して語り合う場を、〈絵解きの空間〉と名づけ、絵本・絵雑誌の表象と関連文書の言説を分析することを通して、近代日本の〈絵解きの空間〉の意義を論考した。対象とする時代思潮と先行研究を概観する序章から、通史的に分析対象資料の出版・流通を概観する第1章、20世紀初頭から1920年代までの絵本・絵雑誌の表象を分析する第2章と第3章、1910～30年代の絵雑誌を絵解きする母親と〈絵解きの空間〉の変容を論じる第4章と第5章、1930～40年代の国策と絵本・絵雑誌の生産者の関わりについて論じる第6章と第7章と展開し、終章ではそれらの分析結果にもとづき、近代日本の〈絵解きの空間〉における子どもと母親の国民化を主体的な臣民化として論考した。よって、本論文は研究テーマが明確に絞り込まれ、一貫した視点により研究対象が分析されている。

### 2) 論文の方法論が明確である。

本論文は、先行研究調査における表象分析やマスメディア研究を踏まえたうえで、社会構築主義の立場から分析をおこなっており、方法論として十分に明確である。また、メディアの意味を①意味媒体、②媒介者、③手段の三つに分節化し、第2章と第3章では①に注目して絵本・絵雑誌の表象分析、第4章と第5章では②に注目して母親の役割と〈絵解きの空間〉の変容分析、第6章と第7章では③に注目して政策との関連における絵本・絵雑誌と母親の役割の変容分析を行うことにより、分析視点の統一を図っている。よって、論文の方法論は明確である。

### 3) 研究テーマについての先行研究調査を十分に行っている。

関連する先行研究調査は、日本近代のナショナリズム研究、近代日本の絵本・絵雑誌および青少年や大人対象のマスメディアに関する出版社・制作者・流通・内容および読者研究、母性およびジェンダーに関する研究、子ども用メディアの出版に大きな影響を与えた研究を渉猟しており、十分に先行研究調査を行っている。

### 4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

研究の素材となる絵本・絵雑誌は、本論文の著者が独自に収集したものを含めて500冊を越え、対象とする期間については欠本を除いて出来る限りの収集と閲覧が行われている。分析対象とする資料については、必要に応じて数量的な動向を把握するだけでなく、質的分析としては表象を解釈することの特性、すなわち解釈の多義性を活用した分析と論考を行っており(特に第2

章および第7章)、分析対象となる資料を十分に吟味している。

#### **5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。**

本論文は、第一に家庭内の〈絵解きの空間〉における幼年の子どもと母親に関して、国民化の問題を考察するというテーマ設定において、第二にそのための分析対象として先行研究のない近代の絵本・絵雑誌を選ぶという資料選択において、先行研究に比較しての独創性を有している。分析結果においては、第一に家庭教育の場における子どもと母親の国民化に関し、絵本・絵雑誌が深い関わりをもったこと、第二にその表象は子どもたちを、男児は兵士へ、女児は子どもを産み育てる存在へとジェンダー化するものであったこと、第三にそれは絵本・絵雑誌の表象において進行したのみならず、媒介者となる母親の母性愛を自然視することによって、またメディア・イベントや「母の頁」の設置等によって家庭内の〈絵解きの空間〉の個別性を失わせ、平準化していくことによっても進行したことを明らかにした。とりわけ新しい知見は、第一に20世紀初頭の絵本・絵雑誌のジェンダーの表象において女児の軍事的参加を促すような多様性を発見したこと、第二に女児および女性の表象については先行研究で指摘されてきたステロタイプの解釈だけでなく、男児や男性の兵士および労働者としての領土拡大の行為を促すような国民としての「欲望する主体」性を解釈でき、20世紀初頭に女児たちがそのような欲望を学んだとすれば、彼女たちは1930年代から40年代には成人して母となり、〈絵解きの空間〉における国民化を再生産する世代となったことが伺えると指摘したこと、第三に子どもと母親の国民化が生活空間の様々な境界の流動・拡大、あるいは崩壊をともなっていると指摘したことである。よって、研究テーマについて、先行研究にはない多くの新しい知見を打ち出している。

#### **6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。**

本論文の全章を通じて議論は常に確かな実証をともなっており、その知見は複数の章の考察をさらに統合的に考察することによってより確かなものとなっている。たとえば、第2章における表象分析(図2-9、図2-19)はその多義性を考察することにより、女性と国民化に関する先行研究の知見を超えた新しい知見をもたらしているが、加えてその知見は序章で参照された表象(図0-3b)との関連、および第4章での母親への広告文や、第5章のメディア・イベントへの参加における母親の役割等とともに考察されることによって、終章において十分な議論を展開して子どもと母親の国民化の様相を述べるに至っている。よって、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

#### **7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。**

上記5)で述べたように、本論文は当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、多くの点で独創性を備えた論文である。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は本論文を博士(人間科学)の学位に値するものと判断する。